

翻訳： イズラエル・シャミール著 『春がきた！』 大失敗！に終わった シオニストによるパレスチナ連帯運動分裂工作

訳と解説： 童子丸開

【訳者からの解説】反ユダヤ（anti-Jewry）ユダヤ人（Jew）であるイズラエル・シャミールの『春がきた！（It's Spring!）』と題された文章は、07年3月にロンドンで開かれたパレスチナ連帯運動年次総会の場で、運動の分裂を策謀するシオニストの手先達からの動議が95%の圧倒的な反対で否決され、その策謀がつかずいたことを伝える。

英国のユダヤ人社会とパレスチナ連帯運動の中では、以前から「隠れシオニスト」と本物の反シオニストとの間で様々な確執が見られた。特にパレスチナ連帯運動を中心的に担ってきた「[デイル・ヤシン・リメンバード](#)（Deir Yassin Remembered：DYR）」に対して、自称マルクス主義者で「シオニズムと対決するユダヤ人たち（Jews Against Zionism：JAZ）」に所属する（潜り込んだ）トニー・グリーンスタイン（Tony Greenstein）らが激しい攻撃を繰り返してきた。ギラッド・アツモンが[アルジャジエラ紙面](#)でこの事情を詳しく書いている。

[DYRの運営委員](#)は半分がユダヤ人、半分が非ユダヤ人であり、の中にはイズラエル・シャミール、モルデハイ・バヌヌ、イラン・ペツパなどの人士も混じる。

グリーンシュタインたちは、まず「DYRの中にネオナチや陰謀論者にも通じる反ユダヤ主義者のイズラエル・シャミールがいること」、次に「DYRの運営責任者であるダニエル・A.マクゴウワン（Daniel A. McGowan）がテヘラン『ホロコースト会議』の最中に獄中の[エルンスト・ツンデルを訪問したこと](#)」、そして「幹部のポール・アイゼン（Paul Eisen）の著作『[Jewish Power](#)』と『[The Holocaust Wars](#)』が極めて反ユダヤ主義的であること」の3点を理由に挙げて、パレスチナ連帯運動からDYRを排除しようとしたのである。しかしその策謀は実に惨めな失敗に帰した。

なお、ここでグリーンスタインなどのシオニストの手先どもが盛んに強調する「反ユダヤ主義（Anti-Semitism）」というレッテルは、集団的恐喝や刑事・民事の法的制裁、経済的・政治的圧力によって個人を社会的に抹殺するためのものである。かつての日本にあった不敬罪をイメージしていただければその意味の概要が飲み込めるだろう。さらに2004年10月には米国で「[全世界反ユダヤ主義監視法](#)」とも言える法律（the Global Anti-Semitism Review Act）が作られた。これは一つの国が諜報機関などを使って世界中の国々の言論をチェックしこの「不敬罪」を取り締まる、というものなのだ。人権も言論の自由も国家の主権も国際法もクソ食らえというわけだ。

こういった世界ファシズム化策謀の中心にあるのが「反ユダヤ」「[ホロコースト否定](#)」を看板にした言論統制、思想統制に他ならない。それを通して「ホロコースト被害者」を自称するシオニストどもが「聖なる上級カースト」として君臨する、という手はずであろう。彼らこそ真の意味のネオ・ナチスである。

このロンドンの小さな出来事は、実は非常に重大な意味を含んでいる。あの米国と並ぶシオニストの巣窟である英国で、部分的にはあるがすでに「反ユダヤ主義」が万能ではなくなってきたことを如実に表現するものだからである。「春がきた」のかどうかは分からないが、今後、欧州市民たちの中からこの真正ネオ・ナチスに対する反乱が次々と起こってくることを期待したい。

なお文面からも明らかになると思うが、シャミールは現在スウェーデンに在住しており、国籍もそちらに移したかもしれない。イスラエル国籍では極めて危険であろう。

春がきた！

イズラエル・シャミール著 （2007年3月）

私の住む避難所にも春が来た。雪はすでに解け、むき出しになった湿地帯がかるうじて幾分灰色がかった緑を保っている。湖に張っていた分厚い氷は砕け何やら白いワニのように岸に這い上がってきた。いまや暖気を帯びた風が吹き、太陽の光があたかもそれが仕事でもあるかのように照らしている。春は贅沢な冬に決着をつけるためにやってきたのだ。私の魂は光と同様に闇を必要としている。そしてこの北緯60度の地と北極圏からや

ってくる雪つぶてを必要としている。私は残忍な地中海の太陽光から遠く離れてここで数ヶ月を過ごしているのだ。ここでは暗闇が子供の夢に出るアイスクリームの山のように気前よくたつぷりと与えられるのだ。神は私が探し求めてきたものを知っている。闇と隔絶を。寒く暗く低い空、そこに満ちた鋭く突き刺さるような星のまたたきを。雪に閉ざされた大地と雪にくるまれた針葉樹を。低い太陽と怠け者の遅い朝を。短い日中と長い宵を。暖炉に燃える火を。氷の上でのスケートと坂道でのスキーを。望みはたつぷりと与えられた。そして今、我が世界に光が降り注ぐ。光から来る光の復活を約束しながら。Light from

Light, Lumen de Lumine, Φώς εκ φωτός.

良いニュースがやってきた。ロンドンでパレスチナ連帯運動が、デイル・ヤシン・リメンバード (DYR) を排斥しようとするユダヤ人活動家達の動議を否決したのである。DYRは最も活動的で最も言い訳がましきのない親パレスチナ団体なのだが、その動議の理由は(他にもあるのだが)この組織と私との関係だったのである。3月10日日曜日に、パレスチナ連帯運動の年次総会で、[二つの動議](#)がトニー・グリーンスタインとロランド・ランスから提案された。この二つの動議はきわめて長く露骨なもので、パレスチナの友人達に対して『反ユダヤ主義 (antisemitism) とホロコースト否定に対する戦い』を運動の主要な目的とせよと要求するものだった。聴衆はこのような厚顔無恥さには敏感である。これらの者達は非常に不誠実であり、グリーンスタインが[クレジットカードの不正使用者として摘発](#)されたときにも全く驚かなかった。以前からグリーンスタインはDYRを中傷してきた。その議長であるダン・マクゴウワン教授と英国支部長ポール・アイゼン、および私の友人であるギラッド・アツモンを、[ガーディアン紙の「連帯運動の見苦しい面」という記事](#)で誹謗していた。そして私に対して「[反ユダヤ主義はシオニズムに対する返答ではない](#)」と題する長い文章で攻撃を仕掛けた。彼らはDYRをストップさせようと試みた。DYRがパレスチナの子供達に奨学金を与え、人々の注意を喚起し、パレスチナの戦いと困苦を伝えているにも関わらずである。彼らは[ポール・アイゼン](#)、[ラムズィ・バロウド](#)、そしてギラッド【[Monday, February 19, 2007 here we go again, shifting focus away from Palestinians, that's what UK Anti-Zionist Jews do best](#)および[Tuesday, March 6, 2007 Gilad Atzmon - Enough is Enough: The Embarrassing Case of Tony Greenstein](#)】の反論を受けた。

そしてこの二つの動議は圧倒的多数で否決された。95%である。これはマリー・リッゾのブログ【[Monday, March 12, 2007 If these are the enemies, who needs friends?](#)】で伝えられた。英国にいるパレスチナの友人達は思想の自由と多元主義を支持することを決意し、そのユダヤ人活動家達が押し付けた狭隘な社会分析であるプロクルステスのベッド【[訳注：ベッドの長さに合わせて客の体を切ったり引き伸ばしたりしたギリシャ神話の強盗](#)】を跳ねつけたのである。もし動議が受け入れられていたらそれは、ギラッドやポール・アイゼンや私ばかりではなく、マイケル・ニューマン、ジミー・カーター、そしてミアシャイマーも同様に不当なものとしていただろう。誰であろうがイスラエル・ロビーについて言及する者があれば反ユダヤ主義者として遠ざけられ抹殺されることになっただろう。「ユダヤ的シオニズム」の創造神話を信じるのが義務化されることになっただろう。つまりこうだ。ただ帝国主義だけが悪いのであり、ユダヤ・ロビーは反ユダヤ主義の発明になるものである、と、[ムハマンド・アーマド](#)が完膚なきまでに論破したとおりである。ホロコーストへの気兼ねがパレスチナのあらゆる友人達にとって義務化されていただろう。しかしながら、パレスチナ人の自由を願う者は自分自身が自由になることを望む。望むとおりに読むことの、書くことの、そして発言することの自由である。だからこそこの甘美な自由を守るために彼らはユダヤの独裁者を拒絶したのだ。

これは自然界の脅威と比較してみた場合に、あるいは人々が様々な場所で行っている主要な争いと比較してすら、小さな出来事である。しかし決して軽視できるものではない。これは、我々の土俵の上ではあるが、一つの重要な戦いであり偉大な勝利なのだ。チャーチルがかつて語ったように、それは終りの始まりではなく始まりの終りなのだ。随分と長い間彼らは望むものを何でも手に入れてきた。右翼のユダヤ人たちはケン・リヴィングストーン【[訳注：現ロンドン市長](#)】やジミー・カーターをその「反ユダヤ主義」のゆえに攻撃した。一方で左翼のユダヤ人たちは同様に激しく私の友人達と私を同じ理由で攻撃した。誰でも、崇敬の念を込めてでない限り「ユダヤ人」と口にしてはならないのである。それだ。なんとか社会的地位を保てるのだ。

この激しい攻撃に傷つけられるため、怯えた者達は撤退し、自ら排斥者の側に加わり、問いかけに答えることを止め、非難する側に回るのかもしれない。出版メディアはもちろんのことウェブサイトも私の文章を載せることを止め、講演会の主催者は私を招待しなくなるのかもしれない。あの恐怖の的であった革コートのチェカ要員のようにユダヤ人活動家たちがあらゆる議論の場に押しかけて、その唯一の論調だけを強制し、そして人々は直立不動になるのかもしれない。最も強固な魂を持つ者だけが、最も決意しそして最も自由を愛する者だけが、彼らの袋叩きの攻撃に立ち向かってきた。ロンドンでの投票結果は変化の前兆なのだろうか。それは我々のつらく長い冬がついに終わったということにな

りうるのだろうか？

それは可能だろう。これが東から吹き付ける風だからである。西側世界は、自らのすばらしい文明と物質的な快適さにもかかわらず、常により良くより深い精神を東方世界から取り入れてきた。パレスチナからキリスト教を、ロシアから社会主義をとった具合にである。そして現在ロシアはVolyaを—これは翻訳困難なロシア語で制限の無い「自由」を意味するのだが—自由に対する戦争、言い換えれば「対テロ戦争」の解毒剤として提供する。ロシアは信じがたいほど自由である。Volyaだらけと言っても良い。レストランや酒場では誰でもタバコが吸え、シートベルトを締める必要は無く、もし空いた場所があればどこにでも駐車して良いのだ。もっと大事なことに、何を発言して書いて出版しても全く構わないのである。西側で手に入るあらゆる自由にプラスして、ロシア人たちはゲイになっても良いしゲイを嘲笑っても良い。ホロコーストを嘆き悲しんでも良いしそれがあまりにも早く終わってしまったことを残念がっても良い。フェミニストになっても良いし彼女らを悩ませても良い。イスラエルを愛しても良いしその早急な解体を叫んでも良い。そしてそう、あらゆる西側のリベラルでユダヤ人所有の新聞は、『血に飢えたKGBの独裁者プーチン』の下でロシアには自由が無いと嘆いている。(あるいは血に飢えた独裁者チャベス支配下のベネズエラか、血に飢えた独裁者カストロ支配化のキューバでも良いのだが—彼らが好まない人物は誰でも血に飢えた独裁者になってしまうのじゃないのかな?) しかしロシア人たちは『政治的に言うところの正しさ (political correctness)』とユダヤ人崇拝から自由である。この二つは戦後の西側世界の困った特徴なのだ。

最近あるロシア人作家グループがイスラエルを訪問してその指導者達に会った。イスラエルにはロシア語をしゃべるイスラエル人たちが百万人以上いる。作家達に対して指導者達はその支配イデオロギーへの忠誠を誓うようにストレートに要求した。つまり、イランを非難すること、中東における民主主義の砦たるイスラエルを褒め称えること、アラブ人に対するロシアの武器供給を非難すること、そしてロシア人の反ユダヤ主義を攻撃することである。ユダヤ人たちは普段から自分が借金取立ての権利を有する者であるかのように感じているため、簡単にその種の要求に応じてしまうのだ。

西側から訪れた者だったら、きっと後で妻にこぼすことになるだろうが、金品を送り届けるどころだろう。普遍的で永遠の「反ユダヤ主義」様【訳注：原文はomnipresent and eternal antisemitismなのだが、このomnipresentおよびeternalは神に対する表現である】を否定することはホロコーストの否定よりましだとは決して言えない。しかしロシアは自由だ。イスラエル指導者達がロシア人作家のマリア・アルバトワに対して、彼女がいかに反ユダヤ主義に悩んでいるか、そしてプーチン独裁の下でロシアの生活がいかに恐ろしいものであるのかを言うように求めたとき、彼女はそれに反論した。

何てことは無い。彼女は次のように語ったのである。現在のモスクワは1960年代のパリようだ。そこでは1ヶ月間にあなた方の国で起こるよりも多くのことが1日のうちに起こっている。今日、輝かしいモスクワは世界の中心なのだ。あなた方に関して言うならば、我々はあなた方に飽き飽きしている。そしてアラブ人たちもあなた方とその要求に飽き飽きしている。この欠陥を抱えた西側の計画はその有効期限を過ぎてしまった。もし私の子供達がイスラエルに移住するようなことを考えることがあれば、私はこう言うだろう。私の死体を踏み越えて行け！と。ロシアには全く反ユダヤ主義は無かった。私は50年の人生の中でそのようなことは一度も経験しなかった。あなた方はユダヤ人たちが職を見つけられなかったとでも言うのか？一度だけ私のユダヤ人の母に仕事を拒否されたことがあった。しかし彼女はすぐにより良い別の職を家族のコネを使って見つけることができたのだ。

以上が、著名なロシア人リベラルの作家がイスラエルの指導者に対して与えた返答である。ロシア民族主義者とは縁もゆかりも無いこのリーダー的なフェミニストの作家マリア・アルバトワは、重要なユダヤ人指導者の祖父を持ち曾祖父は帝政ロシアでのシオニスト運動の創始者だったのだ。しかし彼女の返答は普遍的で明確なパラダイムを示すものだった。西側だったらトニー・ジャットやハロルド・ピンターが、たぶんフィリップ・ワイスでも、言うようなことだろう。他の者達は相変わらず怯えきっている。しかしドイツの僧侶達が口にしてその後繰り返されたような言葉が自由ロシアの中では、ユダヤ人の子孫達によっても他の誰によっても、気軽に語られるのだ。ユダヤ人の神話的な魔力はロシアの中ではすでに擦り切れている。そこでは「政治的に言うところの正しさ」は聞こえてこないし、教会は満員であり、人々はお互いに「キリストはよみがえった」という言葉で祝福しあう。ユダヤ人を呪い攻撃するのではなく、米国の多元文化論が実現していたらこうであるかと思われるほどに、モスクワにいる多くの私の友人達は自らを本当に「全くのロシア人」と思っているのだ。彼らの片親かあるいは両親ともがユダヤ人であり、ロシア・ユダヤ社会の80%が他民族と結婚した時代が過去のものとなっているにも関わらず、そうなのである。彼らの多くがシオニストのプロパガンダに誤誘導されたのだが、彼らにはその誤りに気づき自分の性急さを後悔するための十分な時間があった。

イスラエルは彼らを迷妄から覚まさせることをたっぷりとやったのだ。ロシアの裕福なユダヤ人ですらその「歴史的故郷」の中で歓迎されるどころではなかった。たとえば、成

金の**グシンスキー**は警察の取調べを受けており、彼のスペインの自宅からやって来るたびに警察本部に直行させられるのである。ロシアのユダヤ人の中で最も裕福なユダヤ人の一人である**ガイダマク**は銀行の口座を差し押さえられた。彼らほど有名でないロシア人たちはイスラエルに住み着く古株達からいじめられ追い出された。これはちょうど、50年ほど前にモロッコから来た離散ユダヤ人たちがいじめられて追い出されたのと同じである。彼らのうちのほとんどが言うに値するほどの履歴を作り上げていなかったのだ。イスラエル指導者によって掲げられ推進される永遠の戦争は彼らにとってほとんど心を惹くものではない。ヒズブラーのミサイルは彼らに、イスラエルがもはや頑強な無敵の国ではないことを、そしてイスラエルのシリアやイランに対する来るべき攻撃がイスラエル国民に多くの死者を出すかもしれないことを教えたのである。中東の基準に照らしてさえも腐敗しており嫉妬心による偏見に満ちているため、たぶんイスラエルは上昇志向の強い活力ある人々にとって最も魅力に乏しい場所であろう。

結局のところ、何万人ものロシア系イスラエル人たちがロシアに舞い戻り、自分が生まれた土地に自分の本当の国と本当の家を見出すのだ。シオニストの思想はロマンチックな魅力をたたえていた。しかしそんなことは長続きしない。1970年代に私はタンザニアで自分のルーツを探そうというロマンチックな気分を駆られてアフリカにやって来た数名の米国の黒人達に出会った。その試みはわずかに5年とちょっと続いただけだった。その期間中、彼らは自分達が良くも悪くも米国人であることを思い知ったのである。アフリカ人たちは数多くの民族集団と部族集団でまとまっている。彼らはそのどれ一つにも適応することができなかった。200年経った後ですら「戻って来る」ことはできないのだ。まして2000年も経っているのである。

サンクトペテルブルク出身のロシア人学者ダン・アクセルロッドは私にイスラエルにいる自分の親戚について語った。彼らは何とかしてサンクトペテルスブルクに戻って10年ほど前のエリツィン時代に売り払った自分のアパートメントを買い戻したいと切に願っている。それができないただ一つの理由は、それらのアパートメントの値段がそれ以来10倍にも値上がりしてしまったという悲しい事実なのだ。アクセルロッドはこの種のことに関しては何の心配事も持っていない。両親ともユダヤ人の彼なのだが、熱心に教会に通い正教の厳格な受難節に出席し、そしてロシア人の女性と結婚して子供達には洗礼を受けさせ、自分の国であるロシアを愛しているのである。ロシアはユダヤ人問題の解答を見出したように思える。それはドイツ人の激怒でも米国人の忠誠でもなく、キリスト教の愛に同化することを通してである。このロシア・モデルは実効力のある唯一のものであり、また同時にパレスチナでも次第に効力を発揮するものであろう。

これが、プーチンのロシアがシオニストに支配される公式の西側主要機関に非常に嫌われ非常に反発されているもう一つの理由でもあるのだ。そしてこれが、パレスチナの友人達によってロシアが愛されている理由なのだ。私のスウェーデン人の友人でありパレスチナの友人でもあるステファン・Lは私に次のように書いてよこした。『あなたのプーチンに関する意見は全く正しいと思います。彼がユダヤ成金どもの大敵であることが一つですが、しかし彼はある何かの理由で本当のことを話しているのです。カラニシコフ臭いしゃべり方をする小ネズミ顔のスパイではあるのですが、我々は彼を愛しています。そしてエリツィン時代のことを思い出すたびに我々は彼に永遠の忠誠を誓うのです。』

=====

(翻訳者について)

童子丸 開 (どうじまる あきら) : スペイン在住。ボランティアで英語とスペイン語の文章を和訳しウェブ・サイトなどに投稿、寄稿している。この『春がきた!』の和訳および解説は、木村愛二氏(東京)の努力によって発行されている硬派季刊誌『真相の深層』のために為されたものである。翻訳には慎重を期したが、もし誤訳箇所や不適切な表現などを発見された方がおられたらぜひご一報願いたい。akiradoujimar@infoseek.jp
また『真相の深層』誌に関しては次をご参照いただきたい。
<http://www.jca.apc.org/~altmedka/>